

若い頃の旅好きについては、嘗て書いた。敗戦このかた旅はひどくこたへるやうになつた。私相應の年齢のせいであらう。特に汽車がいけない。窮屈な座席と絶え間ない動揺の、座骨をいためつけ、胃腸をもみくちゃにする。汽車の旅は三時間以内といふことに、何時となくきまつた。或ひは、俗に云ふ水の変るのも、よくないのかも知れない。ひよつとするど、敗戦このかたの乏しい生活に、粗食に飼ひならされた私の胃腸は、宿屋などの御大層な料理には目をまはすのかも知れない。といつて、粗食は私の厭ふところではない。もと、衣食住の粗なのは、むしろ、好みにあつてゐる。馬子にもでなくて、馬子には衣裳と言ひたい方だ。

昨秋、やむを得ず、四国の松山まで出かけた。若い時に少々操縦をならつた飛行機ならとも、思つたが、懐の都合つかず、特急で尾道までおびやかされて、後は船で救はれた。今度はすべて汽車に、不安があつた。が、新米教授として、一度文学旅行に参加しておきたい意欲があつた。それにしても、計画の

## 文学旅行落伍の記

村田 穆

夜汽車で出かけて、早朝からの行動では無理にすぎず。で、昼便で松江に先行し、そこから同行することにした。とはいへ、京都松江間の急行八時間は戦後覚えぬ強行だ。岡山あたりから疲労感が強く、頭痛がはじめ、食べるものの味がぼやけた。松江に着いた時は、雲の上を歩く感じで、階段の降り口で足がもつれ膝をついた。

不安は濃く、食事には特に気をつけたつもりだつた。疲れがひどく、九時過ぎ蒲団にぶつ倒れたが、身体中が苦しくてやりきれぬ。階下の若い男女のコーラスがやけに耳に立つ。ねむれぬ。四時頃、胸苦しく、激しく吐いて。それから数度吐瀉した。熱もある。ここで寝込んで、四五日起き上れぬのは確かだ。又も八時間の汽車は絶望的だが、帰るにしくはない。落伍して引き返す。虫の息みたいたなつて、二条駅にたどり着く、帰宅して、検温したら三十九度。後、一週間寝た。天下の一大事とでもなければ、長途の汽車は御免被りたいと、身にしみて思ふのである。

「Sunin」文学旅行より

山陰文学旅行は、七月二十一日より二十四日にかけて三泊四日の日程で行われた。文学旅行の参加者は年々減少の傾向をみせているが、本年は遂に最少団体成立数三十名を割つて二十七名という予想外の少なさで、各所の観覧料も三名サバをよむ有様。来年度の企画実施にあたっては一考せねばならない。

本年も例によつて和田教授は二十一日朝先行、翌朝美保関で寝惚眼の一行をニコニコとお迎え。初参加の村田教授も和田教授にならつて松江へ直行されたが、別掲のように惜しくも落伍。本年の宿泊地玉造・湯抱は共に温泉地という範疇にはおよそ縁遠い道徳教育を地していく辺鄙な場所。その理合せに最終日湯抱温泉の夜は恒例の「地酒をたのしむ会」に変じた。前夜O大学万葉旅行の一行が放歌高唱で夜を明かしたというこの宿では、「今夜の学生さんはチョンボりおとなしい」と女中さんにハッパをかけられて、正調ワダシゲ節を皮切りに、血廻し、透視術、阿波踊りの数々を披露に及び、お礼返しに「湯抱小唄」の個人指導をうけた某先生「ローチキダンダン」と大いに悦びにいらした。(ZZZ)

## 松江にて

酒井久二夫

「山陰はけっして山の陰ではない」と土地の人は云う。四年前、美保の関から船で松江に入る時に見た夕日は実に美しかった。

都にも似た静かな軒並みか、それとも高台の松影越しに見える千鳥城か、照りつける夏の太陽を背に町を歩いていると、都会と云う感じをぬぐい去る静けさに気付く、人口十万人と聞くこの街は、山陰第一の市である。内都堀のそばに真新しいモダンな県庁が建ち、太きなデパートも出来た。明るい色の観光バスも集まって来る。わずか四年の間に中心部のこのあたりはすっかり変つてゐる。然し城の木影を抜けて裏にまわると、宇治茶の色にも似た堀のよどみがあり、蟬が鳴き、とんぼつりの子供たちが素足でかけぬぐる。そのすぐそばに志賀直哉のかり住まいがあつた。

町はずれの濠に臨んだささやかな家で、独り住まいには申し分なかった。庭から石段で直ぐ濠になつて居る。対岸は城の裏の森で大きな木が幹を傾け、水の上に低く枝を延して居る。(直哉「濠端の住まい」)

直哉は此処で虫と鳥と水と草と空、そして人との交渉ある簡素な暮しをしたと述べている。今も尚、その姿は変わっていない、青々と茂る草も、明るい空も、そして往きかう人さえ何処となく物静かであった。翌年、東大生であった芥川龍之介が松江を訪れ、約年月ばかり滞在した家は、奇しくもこの「濠端の住まい」であつたと聞き、いささか驚ろきもした。バスガイドにも知られず、わずかに通りがかりの近所の人に教えてもらう程の処、表こそ新しくなつてゐるが、橋の上から見ゆる裏庭から石段のあたり、昔のつくままになつてゐる。ただそのあたりを歩むだけに絡つたが、都会をさけて移り住んだ志賀直哉の姿がしのばれる。もう五年近く前なのに。

松江から玉造温泉まで宍道湖に沿つて有料道路を走る事約十分、右に波たつ湖面を見ながら快適なドライブである。年々土砂が流れ込み、何年か先にはやがてうずまつてしまふとの話、見渡すかぎり広い湖面も水深六米の浅さ、風吹けばたちどころに水がにこるあわれな運命を持つてゐる。

夕暮れ近く玉造温泉に着き、一日の行程を絡える、明日は出雲大社と日の碕を訪れる事

を考へながら地図などを見る。

陽も落ちて湖面にえびつりの漁火が浮び、遠くに松江市のネオンが望まれる。湯上がり涼を求め庭に出て、「すんずこ」と発音する女中さんから、湖の話などを聞きながら族の疲れをやすめた。

### 「出雲低唱」抄

和田繁二郎

城兵が敵を迎へし街角をぐるりぐるりと我がバスは曲る(松江の街)  
細きをば合はせし柱なりといへどなほも天守は怖れられしか(松江城)  
紫の淡きに澄める花咲けばヘルン愛せしかこの瑠璃柳(ヘルン旧居)  
七色に変わる湖面かいま我に土色深きしぶきをあびす(玉造、宍道湖)  
歓楽の地域に遠き宿にして庭木に我は下着を干せり  
ネオンの灯色濃くありし対岸に今朝は真白きビルを並べぬ  
さざ波も雲も東に流るるに白き鳥一つ西へはばたく

海猫の官能的といふ声は聞かず空澄めり坂のいただき(日御崎)